

龍谷大学 経営学部

龍谷大学は、文学部（仏教学科、哲学科、史学科、文学科、社会科学）、経済学部、経営学部、法学部の4つの学部から成る文科系の大学です。学生定員は、文学部430名、経済学部400名、経営学部400名、法学部400名で、全学で大学院生、短期大学部の学生も含めおよそ8600名の学生が在籍しています。

大学の起源は非常に古く、1989年には創立350周年をむかえようとしています。起こりは、寛永16年(1639年)に創設された「学寮」です。これは西本願寺の学問講義所でした。以来、名称は、いくたびか変わりながら、今日の龍谷大学へと流れはつづいています。

大学の歴史は、同時に文学部の歴史へと流れているのですが、それに比べると、経営学部の歴史は浅く、昭和41年(1966年)に創設されたものです。その経営学部も念願の大学院経営学研究科修士課程を昭和57年(1982年)に開設し、さらに昨年昭和60年(1985年)には経営学研究科博士課程を設置でき、大学、大学院を通じての一貫教育を行なう体制が完成されました。

経営学部では当初、経営管理論、経営原理論、会計学系の学科目を中心となっていました。情報処理系の分野の内容が経営学を学ぶ学生にとってもぜひ必要であるとの認識から、ここ10年来、着々とこの分野の学科目の充実を図ってきました。現在のカリキュラムで設置されている情報処理関連分野の科目には、次のようなものがあります。経営情報処理概論(4単位)、経営情報処理

実習(2単位)、経営情報システム論(4単位)、経営数学(4単位)、情報産業論(4単位)。これらのほかに、経営学特講、商学特講などの科目で、随時、情報処理に関係した内容の講義が開講されています。

ORという科目はないのですが、経営数学、経営情報処理概論などの科目のなかで、ORに関連した内容の講義が行なわれています。

コンピュータによる実習にも力を入れてきています。実習の科目は昭和54年(1979年)に開講されました。当初はミニコンピュータ、パーソナルコンピュータを用いて実習を開始し、年を追って設備の充実をはかってきました。昨年4月には中型の汎用コンピュータ(FACOM M-340S)を設置しました。これにより、学生実習用の端末30台を接続し、TSS(Time Sharing System)による実習を行なうことができるようになりました。

パーソナルコンピュータによる実習はBASICを中心とし、汎用コンピュータではCOBOLを用いた実習を行っています。これは、文科系の学部ということで、実際にプログラムととりくむことになった場合、COBOLを使用するケースが最も多いからです。

現在の状況はこういったものですが、これではまだ不十分であるので、カリキュラムの根本的な見直しの作業が進められており、今後さらに情報処理(管理工学、管理科学)系の内容の充実が図られる方向で展開されています。(小池 俊隆)

統計数理研究所 (国立大学共同利用機関)

統計数理研究所は、統計に関する数理およびその応用をつかさどり、あわせてその研究の連絡および促進を図ることを目的として、昭和19年6月、文部省所轄の研究所として設置された。以来、わが国唯一の統計数理研究のための独立した研究所として、種々の特色ある研究成果を上げてきた。特に社会現象の研究と関連して開発された「数量化理論」、工業プロセスの研究から端を発した「情報量規準」などは、具体的な応用と統計数理の方法論

とがみごとに融合して結実した、世界的にもよく知られている研究成果である。

近年の学術研究分野の拡大と社会的要請の高度化に即応するために昭和60年4月から国立大学共同利用機関として改組された。これは統計数理の専門家はもとより科学諸分野での研究者との共同研究を強化すること、統計数理の専門家養成に協力すること、当研究所に蓄積された“ソフト”の共同利用体制を整備すること、さらには

当研究所の研究成果の社会的寄与を推進することなどの諸要請に答え得るためである。運営には、所外の学識経験者から成る評議員会の他に、研究所の内外の研究者で構成される運営協議員を置いて、全国の関係大学の研究者の意向が十分に反映されるような組織になっている。

研究組織としては、統計基礎研究系、調査実験解析研究系、予測制御研究系、領域統計研究系の4つの研究系より成り、各系には3~5の研究部門がある。そのうち12の研究部門には専任の教授・助教授・助手が1名ずつ配置され、残りの4研究部門については客員の教授と助教授でまかなわれる。さらに附属施設としては、統計データ解析センターと統計教育・情報センターが設置されていて、センター長は教授が兼務し、室長等には3名の助教授と2名の助手とが専任として配置されている。

現在予定している共同利用・研究協力等に関する主な事項を列挙してみると以下のようになる。

1. 共同研究

研究所内外の関係研究者の参加を得て行なうものとして研究会、グループ共同研究、個別共同研究の3種について実施する。課題名や参加者については公募する。

2. 公開講座

研究者・学生・一般社会人を対象に統計数理に関する公開講座で、概論(初等レベル)、要論(専門レベル)、特論(研究者レベル)の3種を開講する。

3. 大学院学生等の受入れ

統計数理に関する専門家養成のために、大学院学生に対する研究指導を、各大学からの要請により可能な範囲で(当面は12名以内)受託する。

4. 企業等に対する協力・指導

企業等からの要望により、技術者・研究者を受入れて指導を行なう「受託研究員」、また当研究所にとって有意義な研究については受託して研究を行なう「受託研究」、さらに必要に応じて当研究所の教員が統計に関する相談を受ける「研究指導援助」といった制度を設けてサービスを行なっている。

所与のデータからどのようにしたら本質的な情報をとり出せるか、その〈方法〉を探るための総合科学が「統計数理」である。関連諸分野の研究者が、当研究所を積極的に利用して頂けたらと考えている。(鈴木義一郎)

天ノリのつけ方

われわれが普段仕事に使う紙の種類は意外に多い。白紙、便箋、レポート用紙、原稿用紙、グラフ用紙、ルーズリーフの替紙…数えてゆけばすぐに十指にあまる。困ったことにわが国では、A系列の他にB系列の用紙がまだ幅をきかせているから、それだけまた種類が多くなる。これらを整理して、いつでもすぐに使えるようにしておくのは大変なことだ。レタートレー等を使うのもよいがかなりスペースを喰う。

用紙の整理には、紙がバラバラにならないようにしておくことが第1である。買ったときには天ノリがついていて1枚ずつはがせるようになっていたものも、使っているうちにバラバラになってしまう。袋づめや

帯じめで売っているものもある。それに、コピーして作った手製のワーク・シートもある。

こうしたものには自分で天ノリをつけるとよい。紙をそろえて机のヘリにおいて上から重しをのせる。このとき紙のはじを、机のヘリから一寸出っぱらせておくと机をノリでよごさない。パレットナイフで——なければ不要のハガキで充分——木工用の接着剤(ボンド等)をうすくぬりつけて、2時間もかわかせばきれいにできあがる。ただ、かわかぬうちに不注意にふれて衣服をよごさぬようくれぐれの御用心。

こうしておけば、いろいろな用紙もブロックになるので整理が容易だ。残り少なくなったレポート用紙の^{たば}束も、次の束と一緒に天ノリをつければ無駄なく使える。用紙ばかりではない。自分の論文の別刷りも天ノリでまとめておけばちらばらないから、一々別の箱に入れなくても大丈夫だ。請求があり次第1部ずつはぐって進呈すればよい。

(からくり堂主人)

